

# 國學院大學學術情報リポジトリ

〔紹介〕 高橋良久・畠山大二郎共著 『新しく古文を読む一語と表象からのアプローチ』

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 山田, 利博, Yamada, Toshihiro メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.57529/00000596">https://doi.org/10.57529/00000596</a>

高橋良久・畠山大二郎共著

紹介 『新しく古文を読む』

— 語と表象からのアプローチ —

山田利博

既に著者のお一人である畠山氏にそういう感想を送ったが、

「新しく古文を読む」という、一見矛盾しているかのように見えるメイインタイトルは実に秀逸である。なぜなら現代においても古典を読む意義は、正しくそこにあるからである。「古典なんか今は使っていないのだから勉強しても仕方がない」という、まことしやかな嘘を良く聞くが、とんでもない。というのは、今回は万葉集であったために特に有名になったが、元号は全て古典由来のものであり、そういう意味では今も現役で古典を使っているからである。むしろ永遠不滅の命を持ち、時代時代において新たな形で蘇ってくるものが「古典」なのであり、そうならないものは実は「古典」ではないからでもある。そのような意味合いにおいて、本書の試みは実在的である。内容は大きく二部に分かれる。第一部はサブタイトルの「語からのアプローチ」に当たり、うっかりすると見落としがちな

キーワードから、それぞれの作品に迫っている。そして第二部は「表象からのアプローチ」であり、当時の文化的側面から作品に切り込んでいる。そして特筆すべきはそれぞれの論が、高校教科書等で誰でも一度は出会う作品・箇所を対象に、極めて平易に綴られているということである。これは小中高で古文を教えられる先生方が意識されているからであり、文法偏重で退屈な授業になりがちなそれらの先生方が本書を読めば、全く別様な授業展開ができること請け合いである。

さらに評者が個人的にお薦めしたいのは付録のDVDで、畠山氏を知る者なら誰しも納得するが、氏の解説付きで平安と江戸の装束の着付けが取められているのである。古典を教えていると、衣擦れの音で御簾越しの女性の動きを推測する男性の描写が良く出てくるが、このご時世、衣擦れの音がどのくらいするものであるかを聞くことは難しい。氏はそれを十分承知されているので、着付け終わったモデルを歩かせ、その音を聞かせてくれるのである。「なるほど、このくらいの音がするならば手の動作が分かるかもしれない」と、長年の疑問が氷解する思いであった。本書はそういう新しい気づきに満ちている。

(A5判、三三〇頁(付録DVD付)、右文書院、二〇一九年  
二月発行、定価三六〇〇円+税)